

# 『平家物語』卷十一「遠矢」

—延慶本・覚一本を中心に—

青 木 友 恵

## 始めに

## 第一章

従来の学説では、源頼朝が平維盛を敗走させた富士川の戦いは、『吾妻鏡』や

延慶本『平家物語』には次のような記事がある<sup>(1)</sup>。

『平家物語』の記述にあるように頼朝主導で行われたものではなく、この戦いの真の功労者は甲斐源氏であり、彼らの活躍が源氏勢を勝利に導いたものであるということが明らかにされている。甲斐源氏は、その後、棟梁武田信義および嫡子一条忠頼の謀叛・失脚を皮切りに、頼朝によってその勢力を削がれていく一族である。『平家物語』の叙述には、そういった背景が色濃く反映されているものと考えられる。

壇ノ浦合戦の「遠矢」では、延慶本・長門本を除く諸本の中に、甲斐源氏阿佐里与一が登場する。これらの諸本では、源平両者の兵たちが遠矢を競い合う中で、阿佐里与一は、同じ源氏勢の和田義盛をも凌ぐ活躍を見せている。和田義盛は、鎌倉幕府草創期に大功のあった三浦一族の一人で、侍所別当として頼朝の信任厚い人物である。延慶本をはじめとする読み本系諸本では、頼朝の挙兵について詳述されているが、三浦氏の活躍ぶりにも紙幅が費やされている。頼朝に滅ぼされていく甲斐源氏が、このような三浦一族の義盛と対比され、それ以上の手並みを見せているという点で、「遠矢」は興味深い場面である。本稿では、阿佐里与一の登場しない延慶本と、与一の活躍が特に際立っている覚一本を取り上げて、両本の意図するところを考察してゆきたい。

源氏、ツヨ弓精兵ノ矢継早ノ手全共ヲソロヘテ、射サセケル中ニ、山鶏ノ羽ヲ以テハギタリケルガ、本卷ノ上一寸計置テ、「三浦平太郎義盛」ト漆ニテ書タリケルゾ、物ニモツヨクタチ、アダ矢モ無リケル。サテハ可然矢無リケリ。平家はラミテ、大矢皆止テ、伊与国新井四郎家長ヲ以テ射サセタリ。手ゾ少シアバラナリケレドモ、四国ノ内ニハ第一ト聞ヘタリ。三浦平太郎ガ射タリケル遠矢ニ今三段計射増タリケリ。其後源氏モ平氏モ遠矢ハ止ニケリ。三浦平太郎、遠矢ヲ射劣タリトヤ思ケン、アキマ算ノ手呈ニテ有ケレバ、小船ニ乗テ漕廻テ、面ニ立者ヲ指ツメノ、射伏ケリ。都テ矢先ニマワル者、射取ズト云事ナシ。

(第六本「檀浦合戦事付平家滅事」)

覚一本で「遠矢」と題される箇所である。延慶本では、まず源氏の三浦和田義盛が遠矢を射て、次に平家側から新居四郎が遠矢を射返すという流れになっている。傍線<sup>1</sup>は、義盛の射た矢には無駄な矢もなく何れも対象物に深く突き刺さっており、射返すのに使える矢が見つからなかった、というように解釈出来る。傍線<sup>2</sup>では、遠矢の争いで負かされた三浦義盛が、汚名を挽回せんとして奮戦している様子が窺

える。

延慶本の記述は、強弓の誉れ高い義盛をもってしても、源氏方は遠矢の争いに敗れてしまったというものである。延慶本ではこの後、齊院次官親能が登場し、平家の軍兵を散々に射落として味方の士気を大いに高めたという記事が続く。親能の登場によって初めて、源氏が優位に立つことが出来たというのが、延慶本の構造なのである。

次に、覚一本の記事を参照してみる。<sup>2)</sup>

源氏の方にも、和田小太郎義盛、舟には乗らず、馬にうち乗ってなぎさにひかへ、甲をばぬいで人にもたせ、鐙のはなふみそらし、よっぴいて射ければ、三町が内外の物ははづさず強う射けり。そのなかにことにとほう射たるとおほしきを、「その矢給はらん」とぞまねいたる。新中納言これを召し寄せて見給へば、白籠に鶴の本白、鴻の羽をわりあはせてはいだる矢の、十三束二伏あるに、沓巻より一束ばかりおいて、「和田小太郎平義盛」とうるしにてぞ書きつけたる。平家の方に勢兵おほしといへども、さすが遠矢射る者はすくなかりけるやらん、良久しうあつて、伊予国<sup>1)</sup>の住人新居の紀四郎親清召しだされ、この矢を給はつて射かへす。これも奥よりなぎさへ三町余をつつと射わたして、和田小太郎がうしろ一段あまりにひかへたる三浦の石左近の太郎が弓手の肘にしたたかにこそたつたりけれ。三浦の人共これを見て、「和田小太郎がわれに過ぎて遠矢射る者なしと思ひて、恥かいたるにくさよ。あれを見よ。」とぞわらひける。和田小太郎<sup>2)</sup>これを聞き、「やすからぬ事なり」とて、少舟に乗ってこぎいださせ、平家の勢のなかを、さしつめひきつめさむく<sup>3)</sup>に射ければ、おほくの者ども射ころされ、手負ひにけり。又判官の乗りへる舟に、奥より白籠の太矢を一つ射たてて、和田がやうに、「こなたへ給はらん」とぞまねいたる。判官これをぬかせて見給へば、白籠に山鳥の尾をもつてはいだりける矢の、十四束三伏あるに、「伊予国住人新居紀四郎親清」とぞ書きつけたる。判官、後藤兵衛実基を召して、「この矢射つべき者、みかたに誰かある」と宣へば、「甲斐源氏に阿佐里与一殿こそ勢兵にてましまし候へ。」「さらばよべ」と

てよばれければ、阿佐里の与一出できたり。判官宣ひけるは、「おきよりこの矢を射て候が、射かへせとまねき候。御へんあそばし候ひなんや。」「給はつて見候はん」とて、つまよつて、「これは籠がすこしやう候。矢束もちつとみじかう候。同じうは義成が具足にて仕り候はん」とて、塗籠藤の弓の九尺ばかりあるに、塗籠に黒ぼろはいだる矢の、わが大手におしにぎつて、十五束ありけるをうちくはせ、よっぴいてひやうどはなつ。四町余をつつと射わたして、大舟の舳にたつたる新居の紀四郎親清がまただなかをひやうふつと射て、舟底へさかさまに射倒す。死生をば知らず。阿佐里の与一はもとより勢兵の手ききなり。二町にはしる鹿をばはづさず射けるとぞきこえし。其後源平たがひに命を惜しまず、をめきさげんでせめたたかふ。

(卷第十一「遠矢」)

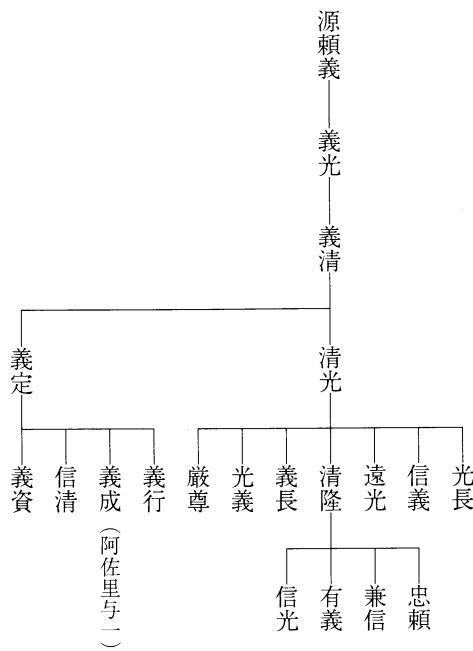
覚一本でも、和田義盛が始めに遠矢を射て、次に平家側から新居四郎が射返すことになっている。傍線1の記述からは、ここでは和田義盛の射た矢をそのまま射返して来たというように読み取れる。延慶本の傍線1の記述と異なり、和田義盛の強弓ぶりはここでは描かれていないのである。新居の射返した矢は、義盛の部下に怪我を負わせ、二重傍線部に見られるように、義盛は同族の三浦一族からの嘲笑を買うという事態を招くことになる。これは、義盛にとって大変に不名誉な記事だと言わざるを得ない。傍線2のように、遠矢を射た後での義盛の活躍も描かれているが、結果的に、義盛は阿佐里与一を引き立てるための囃ませ犬的な役割を演じさせられているのである。

覚一本では最後に阿佐里与一が登場し、新居四郎を射倒してこの場面は幕を閉じる。覚一本には、この後も齊院次官親能の名は見られず、飽くまでも阿佐里与一が源氏を勝利に導く立役者である。延慶本のように、段落を改めて親能の登場を待たずとも、「遠矢」で勝利を収めたのは源氏勢である、というのが覚一本の記述なのである。

第二章

阿佐里与一が物語の中に登場するのは、この「遠矢」の場面のみである。冒頭で触れたような甲斐源氏と頼朝の関わりについては、『吾妻鏡』に散見される。<sup>(3)</sup>以下、『吾妻鏡』の叙述を基に、甲斐源氏が頼朝に滅ぼされていく過程を辿ってみた。なお、参考までに「図1」甲斐源氏の系図を掲載した。<sup>(4)</sup>

図1 甲斐源氏略系図



『吾妻鏡』によると、まず始めに養和元年、甲斐源氏の棟梁武田信義に、朝廷から頼朝追討の官旨が下されたのではないかという嫌疑がかかる。信義は謀叛の心など毛頭ないとの起請文を頼朝に奏上し、その場を凌ぐ。

・『吾妻鏡』養和元年三月七日条  
去月七日。於院殿上<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>議定<sub>一</sub>。仰<sub>レ</sub>武田太郎信義。可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>武衛追討<sub>一</sub>御下文<sub>一</sub>之由被<sub>レ</sub>定<sub>一</sub>。又諸国源氏平均可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>追伐<sub>一</sub>之条者無<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>実<sub>一</sub>。所<sub>レ</sub>限武衛許

也。風聞之趣如此者。依<sub>レ</sub>之。於<sub>二</sub>武田<sub>一</sub>非<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>御隔心<sub>一</sub>。被<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>於信義<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>处。自<sub>二</sub>駿河国<sub>一</sub>今日参着。於<sub>レ</sub>身<sub>一</sub>至<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>追討使事<sub>一</sub>。縦雖<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰<sub>下</sub>。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>進<sub>レ</sub>奉<sub>一</sub>。本自<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>異心<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>条。以<sub>二</sub>去年度々功<sub>一</sub>。定思<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>歎<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>由。陳謝<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>再三之上<sub>一</sub>。至<sub>二</sub>于子々孫々<sub>一</sub>。对<sub>二</sub>御子孫<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>引<sub>レ</sub>弓<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>趣。書<sub>二</sub>起請文<sub>一</sub>。ところが、元暦元年には、信義の嫡男一条忠頼が、威勢を奮い世を乱そうとの志を抱いているとして、鎌倉に呼び出され殺害される。

・『吾妻鏡』元暦元年六月十六日条  
一条次郎忠頼振<sub>二</sub>威勢<sub>一</sub>之余。挿<sub>二</sub>濫<sub>一</sub>世志<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>由有<sub>二</sub>其聞<sub>一</sub>。武衛又令<sub>レ</sub>察<sub>レ</sub>給<sub>一</sub>之。仍今日於<sub>二</sub>营中<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>誅<sub>一</sub>也。

それに伴って信義も失脚し、失意の内に帰らぬ人となる。

・『吾妻鏡』文治二年三月九日条  
武田太郎信義卒去<sub>一</sub>。年<sub>五</sub>元暦元年。依<sub>二</sub>子息忠頼反逆<sub>一</sub>蒙<sub>二</sub>御気色<sub>一</sub>。未<sub>レ</sub>散<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>处。如<sub>レ</sub>此云々。

この一条忠頼誅殺事件は、延慶本と源平盛衰記にも収録されている。文治四年には、忠頼の弟、武田有義が頼朝の鶴岡八幡宮参詣の際に、剣を持って随行する御剣役を拒否して失踪するという事件を起こす。

・『吾妻鏡』文治四年三月十五日条  
召<sub>二</sub>武田兵衛尉有義<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>役<sub>二</sub>路次御剣<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>由。被<sub>レ</sub>仰<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>处。頗<sub>レ</sub>洪<sub>二</sub>申<sub>一</sub>之間。殊有<sub>二</sub>御気色<sub>一</sub>。先年持<sub>二</sub>小松内府剣<sub>一</sub>事。已<sub>レ</sub>謳<sub>二</sub>歌洛中<sub>一</sub>。是非<sub>二</sub>源家恥辱<sub>一</sub>哉。彼者他門也。是者一門棟梁也。対<sub>レ</sub>揚<sub>二</sub>如何者<sub>一</sub>。則<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>朝光<sub>一</sub>賜<sub>二</sub>御剣<sub>一</sub>。有<sub>レ</sub>義不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>供奉<sub>一</sub>逐電云々。

この後有義は、正治二年の梶原景時の謀叛に関連して、失脚してしまふ。

文治元年八月十六日任叙

・『吾妻鏡』正治二年正月二十八日条

伊沢五郎信光自申斐国参上。申云。武田兵衛尉有義請景時之約諾。密欲上洛之由。依聞其告。為尋子細。発向彼館之処。遮而有申言歎之間。兼以逃亡。不知行方。於室屋敢無人。只有一封之書。披見之処。景時状也。同意之条勿論云々。

建久元年には忠頼の弟板垣兼信が、駿河国大津御厨や質侶荘での年貢対捍等の罪によって、地頭職を改易され配流される。

・『吾妻鏡』建久元年九月十九日条

板垣三郎兼信依違勅以下積悪。被処配流科之上其領所可被改地頭職事。備後国在庁等捧申状。訴土肥弥太郎遠平之不法事。被下院宣之間。兩条御請文。載一紙所令言上給也。(以下二書状アリ)

そして、遠江守等を務めた実力者安田義定に關しても、嫡子越後守義資が、建久四年に頼朝に仕える女房に恋文を送ったことを理由に梟首されるという憂き目に逢う。

・『吾妻鏡』建久四年十一月二十八日条

越後守義資依女事梟首。所被仰付于加藤次景廉也。其父遠江守義定。就件縁坐蒙御気色云々。是昨日御堂供養之間。義資投艶書於女房聽聞所訖。而靜後害。敢無披露之処。梶原源太左衛門尉景季妾号前語。夫景季。又通父景時。々々言上將軍家。仍被糾明真偽之時。女房等申詞符号之間。如此云々。三年不窺東家之蟬髮者。一日豈遭白刃之梟首哉。

從五位下守越後守源朝臣義資年

遠江守義定一男

これにより義定自身も所領を没収され、翌年には謀叛の疑いをかけられて討たれてしまふ。

・『吾妻鏡』建久四年十二月五日条

被収公遠江守義定所領当国浅羽庄地頭職。以景廉被補其替。今日賜御下文。大藏兼頼平奉行之云々。

このように、甲斐源氏は他ならぬ頼朝によって排斥され、勢力を殺がれてゆくのである。こういった背景には、源義仲亡き後、同族源氏の一流であり侮るべからざる甲斐源氏勢力を、肅正しようとする頼朝の思惑が働いているものと考えられる。

この甲斐源氏が実質的に戦力を發揮した戦いが、富士川の戦いであると言われている。彦由一太氏<sup>5</sup>・杉橋隆夫氏<sup>6</sup>等は、その当時の甲斐源氏の実力を詳細に考証された上で、富士川の戦いを勝利に導いたのは甲斐源氏であると、『玉葉』にはその経緯が見られることを指摘されている。『平家物語』の富士川の戦いは、水鳥の羽音に驚いて戦わずして維盛軍が敗走したということに焦点が当てられており、甲斐源氏の実際の活躍については全く描かれていない。都からの追討使維盛軍と、関東の源氏勢の緒戦が富士川の戦いである以上、維盛に対するもう一方の雄は、源氏の総大将たる源頼朝でなくてはならぬ、というのが『平家物語』の世界であろう。このような前提の下では、史実はどうあれ甲斐源氏の富士川での活躍は語られることなく、頼朝勢の勝利に収束されていったものと考えられる。

ところが、『平家物語』の描く富士川合戦の中でも、延慶本と覚一本とはその叙述に違いが見られるのである。大將軍維盛の下知により、斎藤実盛が東国勢の恐ろしさを披露する場面を例に取りたい。覚一本の記述は次の通りである。

「いくさは又、親もうたれよ子もうたれよ、死ぬれば乗りこえ乗りこえたたかふ候。西国のいくさと申すは、親うたれぬれば孝養し、忌あけて寄せ、子うた

れぬればその思歎に寄せ候はず。兵糧米つきぬれば、春は田をつくり、秋はかりをさめて寄せ、夏はあつしといひ、冬はさむしときらひ候。東国にはすべて其儀候はず。甲斐、信濃の源氏共、案内は知ッて候。富士のすそより、搦手にやまはり候らん。かう申せば君を隠せさせ参らせんとて申すには候はず。いくさは勢にはよらず、はかり事によるとこそ申しつたへて候へ。実盛今度のいくさに命いきて、ふたたび都へ参るべしとも覚え候はず」と申しければ、平家の兵共これをきいて、みなふるひわななきあへり。

(卷第五「富士川」)

ここでは、実盛は東国勢の猛々しさを次々に列挙し、最後に当面ぶつかる現実的な問題として、富士川周辺の土地の事情に明るい甲斐・信濃源氏の背面攻撃を懸念し、指摘しているのである。この後実際に、戦い前夜に水鳥の羽音が聞こえた時には、

平家の兵ども、「すはや源氏の大勢の寄するは。斎藤別当が申しつる様に、定めて搦手もまはるらん。とりこめられてはかなふまじ。ここをばひいて、尾張河洲侯をふせげや」とて、とる物もとりあへず、我さきにとぞ落ちゆきける。

(卷第五「富士川」)

という結果になっている。覚一本の記述からは、甲斐・信濃勢に退路を断たれることは、平家側の最も恐れていたことであつたと読み取ることが出来る。このような記述は延慶本には一切見当たらない。搦め手を守る甲斐・信濃勢が平家の陣に与えた心理的圧迫については、延慶本では全く語られていないのである。

延慶本では、頼朝から平家に宣戦布告の牒が送られたという記事がある。次に引用してみる。

兵衛佐使ヲ立テ被申ケルハ、「親ノ敵ト優曇花トニ合事ハ、惣テ難有事ニテ候ニ、近ク御下候ナルコソ悦存候へ。明日ハ念見参ニ入ベシ」ト被云送タリ。

(第二末「平家ノ人々駿河国ヨリ逃上事」)

ところが、『玉葉』治承四年十一月五日条によると、この手紙は甲斐源氏の側から出されたものになっているのである。<sup>17)</sup>

・『玉葉』治承四年十一月五日条

同(治承四年十月)十七日朝、自武田方以使者、相副送維盛館、其状云、年来雖有見参之志、于今未遂其思、幸為宣旨使、有御下向、雖須参上、程遠隔二日路峻、輒難参、又渡御可煩、仍於浮嶋原甲斐興駿河之相互行向、欲見参云々、問広野云々

この直前の記事には、甲斐勢が駿河目代橘遠茂の軍勢と戦ってこれを討ち滅ぼし、目代以下の首を路頭に架けたというものが見られる。元々優勢であつた甲斐源氏が、宣旨の使であるといはれぬ真実維盛に迎合する腹であつたとは考えにくい。実際に、この後維盛は、この文面に腹を立て武田からの使者二人の首を刎ねており、丁重な言葉を使つてはいるものの、挑発的な文面であると受け取ることが出来る。歴史家の方々の著書でもこのような解釈が通説のようである。<sup>18)</sup>この『玉葉』の記事の信憑性についてであるが、福田豊彦氏が詳しく検証されている。<sup>19)</sup>大略を次に示す。

『吾妻鏡』や『平家物語』の甲斐源氏に対する記事は冷たく、特に富士川緒戦の時期のその勢力を矮小化している。『玉葉』では、甲斐源氏は富士川以前に平家方と衝突しており、富士川合戦の画期的な勝利もその活躍に負うところが多かったことを伝えている。『玉葉』の記事は伝聞資料だが逃げ帰つた平家軍の入京当日の記事であるので信憑性も高く、史実に近いものと考えられる。

彦田・杉橋両氏も、前掲論文の中で『玉葉』の記事を検討された結果、富士川の戦いは甲斐源氏勢力の軍事的主導の下に行われたものである、と言及されている。ここで改めて延慶本に目を転じてみると、頼朝側から平家に牒状を送つたという延慶本の記述は、富士川の戦いが甲斐勢ではなく頼朝主導で行われたとするための、作

為的な改変ではないかと考えられる。

他の記録類と比較すれば頼朝中心の描き方ではあるものの、甲斐源氏の脅威が表出されている覚一本に対して、甲斐源氏の功績を頼朝にすり替え、富士川合戦の主役を完全に頼朝としたものが延慶本の形態であると言える。

### 第三章

次に、和田義盛について見ていきたいと思う。和田義盛は三浦介義明の孫にあたり、弓矢の名手としても名高く剛勇をもって知られた人である。義盛は三十四歳という異例の若さで侍所別当に抜擢され、頼朝の下で長年に亘って鎌倉の治安維持に貢献している。頼朝と和田義盛との関係は極めて良好だったと言えるが、頼朝亡き後三代將軍実朝の時に、和田合戦が勃発する。事件の発端は建保元(一一二二)年二月、信濃の住人泉親衡が、二代將軍頼家の遺子千手を奉じて謀叛を企てた際に、その同調者として義盛の子義直・義重及び甥の胤長が逮捕されたことにある。義盛の放免要求にもかかわらず、胤長のみは許されずに和田一族の面前で縛られたまま陸奥へ配流され、屋敷地も北条義時に与えられた。義盛はこれらの措置を義時の策謀とみて、鎌倉幕府と執権北条義時に反旗を翻すが、二日に及ぶ合戦の後敗死する。乱の失敗は同族三浦義村の裏切りに因るところが大きく、義盛の旗揚げを北条義時に注進した義村等三浦の本流は北条と共に生き残り、和田一族は滅ぼされる。このように和田義盛は、後年三浦一族の中でも特異な立場に置かれているのである。

ここで、和田合戦についての当代評を見てみたい。『古今著聞集』第十五「闘諍」には次のような記事がある。<sup>11)</sup>

「三浦犬は友をくらふなり」

これは同族である義盛を裏切り、北条氏に義盛の挙兵を注進した三浦義村を揶揄した言葉である。『古今著聞集』の成立期を一二五四年とすると、合戦勃発当時の一

般的な解釈が、このようなものであったのだろうと考えられる。

三浦一族は頼朝の旗揚げ当初から数々の功績を残しており、延慶本等の読み本系諸本では、その活躍の様が具に描かれている。頼朝の挙兵については覚一本等語り本系では、極簡略な記事になっており、今回比較の対照にはならないと考えられる。延慶本・覚一本双方に和田義盛が登場するのは、寿永三年二月四日西国発向の記事が最初である。ここで義盛は搦手の義経軍に名を連ねており、義経勢として平家追討に向かったものと考えられる。以下、壇ノ浦に到るまでの和田義盛について検証してみたい。

まず、延慶本の一谷合戦の記事を見てみる。

・一谷合戦の坂落し

九郎義経ハ、一谷ノ上、鉢伏、蟻ノ戸ト云所へ打上テ見ケレバ、軍ハ盛ト見タリ。下ヲ見下セバ、或ハ十丈計ノ谷モアリ、或ハ二十丈計ノ巖モアリ、人モ馬モスコシモ通ベキ様ナシ。(中略)源氏ノ兵ノ其時色ナヲリテ、人々我先ニ落ムトスル処ニ、三浦ノ一門ニ佐原十郎義連ス、ミイデ、申ケルハ、「人モ乗ヌ馬ダニモ落シ候。義連落シテ見参ニ入ラム」トテ、威シマゼノ鎧ニ、栗毛ノ馬ニ乗テ、幡一流指上テ、マ(ツ)逆ニ落ス。五丈計ゾ落タリケル。底ヲミタレバ猶五丈計ゾ有ケル。御方へ向テ申ケルハ、「是ヨリ下へハイカニ思トモ叶マジ。思止給へ」ト申ス。「三草ヨリ是マデハルぐト下タレバ、打上ムトストモカナウマジ。下へ落シテモ死ムズ。トテモ死バ敵ノ陣ノ前ニテコソ死メ」トテ、手繩ヲクレ、マ(ツ)逆ニ落サレケリ。(畠山重忠が馬を担いで下りたという記事)是ニツギテ佐原十郎義連、「実ニ三浦ニテ朝夕狩スルニ、是ヨリ嶮シキ所ヲモ落セバコソ落スラメ。イザヤ若党」トテ、一門引具テ、和田小太郎義盛、同次郎義茂、同三郎宗実、同四郎義胤、葦名太郎清隆、多々良五郎義治、郎等ニハ物部橋六、アマ太郎、三浦藤平、佐野平太、是等ヲ始トシテ、義経前後左右ニ立並テ、手繩カヒクリ鎧フミハリ目ヲフサギテ、馬ニ任テ落シケレバ、義経「ヨカメルハ。落セヤ、若党」トテ、先ニ落シケレバ、落トッコホリタル七千余騎モ我ヲトラジト皆ヲトス。(第五本「源氏三章山并一谷追落事」)

ここでは和田義盛の叔父にあたる佐原十郎義連が、一谷の坂落しの先陣を切った様子が描かれており、それに続いて三浦勢が傍線部のように義経をリードする形で、次々に坂を駆け降りていったという記述になっている。一谷合戦以降の義盛の動向を辿ってみると、延慶本では、この後義盛は義経に従って八嶋合戦に参加している。

・八嶋入りでの活躍

判官、「ヨカンナルハ。打ヤ、殿原」トテ、畠山庄司次郎重忠、和田小太郎義盛、佐々木四郎高綱、平山武者季重、熊谷次郎直実、奥州佐藤三郎兵衛継信、同舎弟佐藤四郎忠信、究竟ノ兵者已上七騎、早走ノ進退ナルニ乗テ、歩セツアガ、セツ、屋嶋ノ館ヘゾ馳行ケル。  
(第六本「伊勢三郎近藤六ヲ召取事」)

畠山、和田義盛以下の七騎を究竟の兵と評し、彼らが八嶋に一番乗りしたことが記されている。続いて八嶋合戦の記事を挙げる。

・八嶋合戦

畠山庄司次郎重忠進出テ申ケルハ、「音ニモキケ、今ハ目ニモミルラン。武威  
国住人秩父ノ流、畠山庄司次郎重忠ト云者ゾ。我ト思ワン者ハ出テ押並ベテ組  
ヤ」ト申テ、ヲメイテ係ク。同国住人熊谷次郎直実、同国住人平山武者季重、  
一人ハ奥州佐藤三郎兵衛継信、同舎弟佐藤四郎兵衛忠信、一人ハ相模国住人三  
浦和田小太郎義盛、一人ハ近江国住人佐々木四郎高綱、七騎ノ者共、我モく  
ト名乗係テ、船ニ向テ歩セ出テ、追物射ニ散々ニイル。平家モヘヤカタニカヒ  
ダテカキテ、是モ散々ニイル。七騎ノ人々、馬ノ足ヲモヤスメ、我身ノ息ヲモ  
ツガムトテハ、渚ニヨセライタル舟ノカクレニ馳ヨ(ツ)テ、シバシ息ヲモ休メ  
テケレバ、又ハセ出シテ名乗係テ散々ニイル。

(第六本「八嶋ニ押寄合戦スル事」)

傍線部では、先程の七騎の武者達が矢玉を掻い潜って平家の船に接近して行く様が

描かれている。延慶本では、義経配下の七騎の勇将の一人として、和田義盛の西国での活躍が語られているのである。

次に覚一本の記事を見てみる。

・一谷合戦の坂落し

御曹司城塙はるかに見わたいておはしけるが、「馬どもおといてみむ」とて、鞍置馬を追ひおとす。或は足をうち折ッて、ころんでおつ。或は相違なくおちてゆくもあり。鞍置馬三疋、越中前司が屋形のうへにおちつて、身ぶるひしでぞ立ッたりける。御曹司是を見て、「馬どもはぬし〜が心得ておとさうには損ずまじいぞ。くはおとせ。義経を手本にせよ」とて、まづ卅騎ばかり、まツさきかけておとされけり。大勢みなつづいておとす。後陣におとす人々の鎧の鼻は、先陣の鎧甲にあたるほどなり。小石まじりのすなごなれば、ながれおとしに二町計ざッとおといて壇なる所にひかへたり。それより下を見くだせば、大盤石の苔むしたるが、つるべおとしに十四五丈ぞくだッたる。兵どもうしろへとツツてかへすべきやうもなし。又さきへおとすべしとも見えず。「ここぞ最後」と申してあきれてひかへたるところに、佐原十郎義連すすみいでて申しけるは、「三浦の方で我等は鳥一つたてても朝夕か様の所をこそはせありけ。三浦の方の馬場や」とて、まツさきかけておとしければ、兵どもみなつづいておとす。ゑい〜声をしのびにして、馬に力をつけておとす。あまりのいぶせさに、目をふさいでぞおとしける。おほかた人のしわざとは見えず。ただ鬼神の所為とぞ見えたりける。  
(巻第九「坂落」)

覚一本ではまず大将義経自らが坂落しを執行して、一旦踏みとどまった源氏勢を導いたのが三浦義連であったとされている。三浦一門が手本となったという延慶本の記事と比較すると、覚一本の三浦勢の働きは影の薄いものとなっている。覚一本では、ここに義盛の名は見られないのである。更に、覚一本では八嶋合戦にも義盛は登場しておらず、義盛の奮戦を繰り返して語る延慶本の記事とは対照的である。

『吾妻鏡』は、この時期の和田義盛について次のように記している。

・『吾妻鏡』元暦二年正月十二日条

参州自周防国到赤間関。為攻平家、自其所欲渡海之處、粮絶無船、不慮之逗留及数日。東国之輩、頗有退屈之意、多恋本国。如和田小太郎義盛、猶潛擬歸参鎌倉。何況於其外族乎。而豊後国住人白杵二郎惟隆、同弟緒方三郎惟栄者、志在源家之由、兼以風聞之間、召船於彼兄弟、渡豊後国、可責入博多津之旨有議定。仍今日、参州歸周防国云々。

この記事は、元暦二年正月十二日には、赤間関まで進軍した範頼勢が兵糧も船も無いために渡海出来ず、周防国に帰るといふ状況であったことを伝えている。注目すべき点はこの範頼勢の中に和田義盛がおり、あまりの窮状に義盛までもが鎌倉に帰りたといふ願ったといふ箇所である。『吾妻鏡』によれば和田義盛は義経軍ではなく、範頼勢に加わっていたと書かれているのである。同じく元暦二年正月二十六日条には、兵船と兵糧米を手に入れた範頼が、周防から豊後国に渡ったとあり、その中に義盛の名前も挙がっている。

・『吾妻鏡』元暦二年正月二十六日条

惟隆・惟栄等、含参州之命、献八十二艘兵船。亦周防国住人宇佐那木上七遠隆献兵粮米。依之参州解纜、渡豊後国云々、同時進渡之輩、(和田義盛ノ名アリ)

『吾妻鏡』を調査していくと、この後八嶋合戦が行われる元暦二年二月十七日前後でも、範頼は豊後・長門・周防辺りで、九州の平家を攻めあぐんでいた様子が窺える。<sup>12)</sup> 義盛はこの時範頼軍の軍奉行を務めており、常に範頼と行動を共にしていたものと考えられる。従って義経勢の一人として八嶋合戦に加わることは、不可能である。

ここで重要なのは、『吾妻鏡』の記事の信憑性を追求することではなく、記録類にも記され得なかった和田義盛の活躍を、延慶本は多分に盛り込んでいるという点

である。『平家物語』の八嶋合戦そのものが、武功談・武勇談を主軸とした創作としての面白さを身上としていることは、既に北川忠彦氏・島津忠夫氏等が提唱されている。<sup>13)</sup> 延慶本の記述の背後には、拳兵当初から大功のあった三浦一族への配慮が見られると考えられる。ここで、更に和田義盛個人に焦点を当てて論じてみたいと思う。小林美和氏は延慶本の成立時期を二段階に分けて捉え、その第一次成立期を一二〇八年から一二三三年とされている。<sup>14)</sup> この年代は奇しくも和田合戦の時期と重なり合うものである。延慶本の記述の中に、和田合戦についての当代の世評が入り込むことは、大いに予想出来るものであろう。

### 終わりに

ここでもう一度、巻十一「遠矢」について考えてみたい。西海での源平合戦の主眼は、八嶋での那須与一の活躍を始めとする弓勢の戦いである。この「遠矢」の場面は源平最後の決戦壇ノ浦合戦の一場面であり、そこでの源平両者の兵の中から弓の上手の筆頭に輝く人物として、覚一本は甲斐源氏の阿佐里与一を描いているのである。このような叙述は、甲斐源氏を弾圧しようとする頼朝の思惑とは掛け離れたものである。その一方で和田義盛の描写は、弓矢取りの名誉は阿佐里与一に奪われ、同族三浦一族の誇りまで受けるといふ辛辣なものである。和田合戦の後、目の上の瘤であった和田氏を滅ぼして北条氏が政権を握り、三浦の惣領義村が強大な力を持つようになった。覚一本が成立した頃には、和田義盛は歴史の表舞台から抹殺された存在だったのである。覚一本の記述は、三浦一族の中に於ける和田義盛の微妙な立場を暗示したものではないだろうか。

これに対して、和田義盛の名誉回復記事で「遠矢」の場面を終結させ、阿佐里与一の登場しない延慶本の叙述は、三浦一族を重用し甲斐源氏を排斥するという頼朝の意志を、如実に反映しているものである。三浦義村を「三浦犬は友をくらふ」と評する『古今著聞集』の記事からも明らかのように、当代評は和田義盛に同情的であったのである。延慶本の叙述には、このような当時の世評がそのまま取り込まれているのではないかと考えられるのである。



稿を終えるに臨み、終始御丁寧な御教示を賜りました松林靖明教授に、心より御礼申し上げます。

本稿は、以前関西西軍記物語研究会第43回例会に於いて発表したものを骨子にして、更なる知見を加えたものであります。発表時に御質問、御教示を賜りました諸先生方に、厚く御礼申し上げます。

## 注

- (1) 延慶本『平家物語』本文の引用は、北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語本文篇上下』（勉誠社 一九九九年）に拠る。
- (2) 覚一本『平家物語』本文の引用は、市古貞次『新編日本古典文学全集45平家物語①・46平家物語②』（小学館 一九九四年）に拠る。
- (3) 『吾妻鏡』の引用は、黒板勝美『増補新訂国史大系第32卷吾妻鏡前編』（国史大系刊行会 一九三二年）に拠る。
- (4) 甲斐源氏の系図については、『続群書類従・第5輯下』（一九二七年）の武田系図を参照した。
- (5) 彦由一太「甲斐源氏と治承永承争乱——内乱過程に於ける甲斐源氏の史的評価」改題——（『日本史研究43』一九五九年七月）所収。
- (6) 杉橋隆夫「富士川合戦の前提——甲斐路「鉢田」合戦考——」（『立命館文学50』一九八八年十二月）所収。
- (7) 『玉葉』の引用は、市島謙吉『玉葉』（国書刊行会 一九〇六年）に拠る。
- (8) 磯貝正義「図説日本の歴史19山梨県の歴史」（河出書房新社 一九九〇年）、飯田文弥・秋山 敬・笹本正治・齋藤康彦「原史19山梨県の歴史」（山川出版社 一九九九年）等でも、この文面を挑発的であると解釈している。
- (9) 福田豊彦・服部幸造『源平闘諍録下』（講談社 二〇〇〇年）。
- (10) 和田合戦の概要については、宇野俊一・大石 学・小林達雄・佐藤和彦他『日本全史（ジャパン・クロニック）』（講談社 一九九一年）を参照した。
- (11) 引用は、西尾光一・小林保治『新潮日本古典集成76古今著聞集下』（新潮社 一九八六年）に拠る。
- (12) 『吾妻鏡』元暦二年二月十四日条  
 参州日來在「周防国」之時。武衛被「仰遣」云。令「談」于土肥「二郎」。梶原平三。可「召」九国勢。就「之」。若見「帰伏」之形勢。者。可「入」九州。不「然」者。与「鎮西」不「可」好「合戦」。直渡「四国」。可「攻」平家者。而令参州欲「赴」九国。無「船」而不「進」。適雖「渡」長門国。粮「尽」之間。又引「退」周防国「訖」。軍士等漸有「変意」。不「一」揆「之」由。被「歎」申「之」。
- (13) 北川忠彦「八嶋合戦の語りべ」（『論集日本文学・日本語3中世』角川書店 一九七八年）。島津忠夫「二谷・屋島・壇浦合戦をめぐる」（『平家物語試論』汲古書院 一九九七年）。
- (14) 小林美和『平家物語生成論』（三弥井書店 一九八六年）。